

## 井上円了の足跡

針 生 清 人

### 一

井上円了（安政五〜大正八年、一八五八〜一九一九）の思想活動は、いまだ大学が一枚しかないとき（明治十九年帝国大学令による東京帝国大学）、それに哲学（従って一般に学問）が独占されているとして、哲学の民衆への解放と普及とを意図して哲学館を創立（明治二十年）したことに始まる。しかし円了の社会啓蒙の仕事が進むにつれて、哲学から倫理学へ、さらに日本の倫理学へと進み、それと関連して仏教の振興を力説するにいたっている。<sup>(1)</sup>そして窮極するところ円了の活動は修身教会（明治三七年）と国内巡講とによる社会的実践に向ったといえる。それは仏教の振興とそれによる道德の教化、向上というより具体的、より実践的、より民衆的な活動を地方に広げることにあつた。この修身教会の活動は「修身教会雑誌」全35号に、また全国巡講の詳細は「南船北馬集」全16巻にまとめられている。<sup>(2)</sup>

円了の思想活動を貫くものは「官」に対する「私」、「国家」に対する

井上円了の足跡

「庶民」の立場である。この立場を貫くための方法は国家の援助を求めず市井にあることはもちろんであるが、より積極的には庶民と共にあるということがある。しかしそれは、単に庶民とともにあるということではない。体制から常に切り捨てられる庶民に自発し、自ら精神的に向上、成熟する意欲を喚起することにある。円了はこのことを道德、宗教によって為そうとしたのである。それが「修身教会」という小結社を自発的に地方に形成させることであり、いかなる山間僻地の寒村であれそれに向けての啓蒙の行脚ともいふべき全国巡講であつた。この小結社と巡講とは地方の独自性と主体性によつて自発的に計画され運営されるべきもので、円了はこの地方の主体性に仏教の振興と道德の向上を托したのである。

明治という時代をふりかえるとき、地方に向つて「歩く」ということの重大な事柄にぶつかる。その一つは明治天皇による全国巡幸88回であり、他は自由民権派による地方演説である。それらは何れも地方人心を把握しようという意図の下で行なわれたもので、この意味からすれば円了の巡講も同様のものといえる。しかもその意図が異なるところに問題があるとい

える。

修身教会設立の必要、目的等については『修身教会設立旨趣』（明治三六年九月）に要約されているが、その設立を思い立ったのは、円了が「今日の時弊」として捉えるその時代認識、特に道徳面での危機感にあったといえる。それは『修身教会雑誌』に五回にわたって述べられた「修身教会設立に就きて」によっても伺い得る。

維新以来、国民の知識の発達も著るしいが、それは「智識一方に偏し、修身道徳の一般に至りては、却て退歩した」ようであり、「今日の時弊は、人皆智の眼あるも徳の足なきにあり」、そのような「徳なきものは真の智」ではなく、偽智、狂智、病牀の智、不具の知に他ならず、従って我が国民は「不具の国民たるを免れ」ない。ここで時弊といわれるのは、「義を忘れ恩に背き、約を破り人を欺き、自ら一時の利を貪るを以て足れりとし、商売には、政略を要するも道徳は無用なり、人は法律の罪人とならざる以上は、如何なることをなすも勝手なり、人間万事金の世の中、金さへあれば」という風潮に加えて、「天罰天誅などは、仮説の方便」とするような無宗教をうそぶくところが少なくない状況がある。特に日清戦争後、この風潮が顕著であり、それがあるが故に、日露戦争中に修身教会を設け、戦後に予期される道徳の低下を危惧し、平和回復後のあるべき道徳の確立を提唱したのである。

## 二

道徳の頹廃は今に始まったことではない。「道徳の退歩」の原因を円了は次のように要約している。維新前の国民道徳は儒仏二道によって「人

をして其守る所を知らしめ、向う所を誤らざらしむるを得」てきたところであるが、維新以後、「儒仏二道排斥するに至り」、忠孝・仁義等は陳腐旧弊として捨てられ、「治心の術も修養の道」も抹殺され、極端な「西洋崇拜」によって国民道徳における「旧来の元子を悉く煎殺するに至」っている。しかも西洋から輸入したものは「器械上の文明、物質上の文明」であり、「法律思想、政治思想、自由思想」であるが、これらは西洋文明の表層、外套、紅粉、皮膚であって深層の精神ではない。明治初期に叫ばれた「文明開化」は西洋文明の産物を受容はしたが、西洋文明の根柢を問うことはなかったのである。今、日本が真に文明国の名に値するものを形成せねばならぬとき、その根源を考究せねばならない。

西洋の精神はその「哲学及宗教の中」に在るといわざるを得ない。しかしその哲学は「学者の理想」を支配するだけであって、「未だ一般の人心を維持するに至」っていない。従って、輸入された哲学の我国における位置も同じく学問世界の内に留まるものである。西洋にあって一般の人心を維持するものは「耶蘇教」である。日本が輸入した西洋文明は「西洋人の精神より、自発自生せる」ものであるが、その西洋文明を「人心中に維持して失はらざらし」めたのは耶蘇教の「教化薫習の力」である。しかし維新以後の時代風潮が「欧化の主義、西洋崇拜主義、西洋狂」と称されたように、「西洋を崇拜して欧米の文明を悉く輸入」しているところであるが、「耶蘇教だけでは世間一般に之を厭ひ、之を棄て」ている。このことは奇怪なことで「我國民には耶蘇教を蛇蝎の如く嫌ひし遺伝性ありし故と見るより外は」なく、西洋から全ての学問を輸入するが、「独り宗教に至りては之を遠ける方針を取る」かのようである。<sup>(3)</sup>従って、西洋にあって人の精

神を支配し、道德を維持して来た哲学と宗教とは、「我國民一般の精神道德に對しては、何らの影響する所」<sup>(4)</sup>がなかった。とすれば、日本には人心を「教化薰習する力」をもつものは維新以後にはなくなっているということである。

「すべての學問が皆修身道德を目的」としていた我が國では、維新以後、「從來の道德を專任せる神儒仏を棄て、西洋の學問のみを取り、其道德を支配せる耶蘇教を遠くる」<sup>(5)</sup>のであるから、「國民の道德を維持する道を断絶」したことになる。確かに現状はなお「幾分の道義心を留め、未だ全く其痕を絶つに至」<sup>(5)</sup>ってはいない。しかしそれは「從來の習慣の余勢あるによる」にすぎぬのであり、「惰力の然らしむる」ところのものである。このように、「社会の大勢は道德の源泉を断ち、國民の精神を枯渴せしむる」ような道德の「暗黒時代」であり、國民は「儒仏の旧衣を脱したる儘、未だ之に新服を与へざる有様なれば、道德上裸躰的國民」<sup>(6)</sup>といわざるを得ない。このような國民道德の頹廢を生み出したものは何なのか、そしてそのような狀態を「挽回振起する」ことを講じなければ「他日不治症」となるであらう。

以上のような道德の頹廢については「世の普く知る所」であるからこそ、天皇も「いと御ねんごろなる勅語を下し」たのであり、政府においても「國民教育の上には、特に重きを修身に置き、全国の學校をして、毎週德育を授けしむる」ことになったという。円了はこの点では、教育勅語の發布も修身教育の強化も臣民化の達成においた体制の目的を見ずに、單に道德の頹廢の「挽回振起」のためのものとのみ見なし、円了自らが目的とする修身教會の設立と関連づけて、直ちに肯定しているのである。教育勅語によ

つて、「実に道德の太陽再び東天に現れるが如く、我々國民は始めて道德の光明を拝するの仕合せを得た」<sup>(7)</sup>ともいえるが、現状は學校で教えるだけのものであり、しかも「學校の儀式のときに奉読するのみのものと心得るものあるかと思」われる現実がある。確かに教育勅語は「國民德育の教本」としては秀れてはいようが、「今日の狀態にては、之を読むものもあるも解するものなく、解するものもあるも行ふものなく、……御札の如く崇拜せられ、儀式のある毎に謹んで奉読せらるゝも、其感化の國民の実行上に及ぼすこと能わ」ざる實際がある。いうならば、「今日にては勅語は形式の上のみに存して、実行上に活用せざるかの疑」<sup>(8)</sup>がある、と円了はいう。この点では、円了は教育勅語の實際的效果について懷疑的であり、「勅語の御訓誨と國民の実行と、其相隔つや天涯万里」<sup>(9)</sup>というところである。それ故当然、教育勅語の内容を解説、教示することが必要である。

しかし、學校における道德教育についても円了には疑義のあるところである。確かに國民の道德の維持を果すのは「學校に於て授くる所の德育」である。しかし「一般の國民に對しては、尋常小學校の德育」が存するにすぎない。それ以外に「國民の道德教育を授くる所」はないのである。しかしその尋常小學校での「修身教育は、修身の基礎を作るまでにて、未だ建設するに至」<sup>(10)</sup>ってはいない。それ故、眞の道德の涵養は全く卒業後の社会においてなされねばならぬところである。

### 三

尋常小學校で授ける德育の教本であると円了が述べる教育勅語にもられた徳目についてみると、「夫婦相和シ」、「博愛衆ニ及ホシ」、「公益ヲ広メ

世務ヲ開キ」など小学児童に理解し難いものがある。さらにいえば、実業の道徳、社会の公德、国家の観念、海外事情および国際関係、風俗の矯正、社会の改善の必要、変事に対する国民の心得など教えるべきものは多いがそれらは欠けており、教えるにしても「十二歳未満の児童に了解せしむる」ことは困難である。しかも学校教育は智徳の健全を目的としてはいるが、「智能は啓発し易く、徳器は成就し難い」という欠陥を有しているといわざるを得ない。従って知育と徳育を両立させるためには、学校教育の外に「家庭教育と社会の制裁」が必要となる。この二者に關していうと、それらは学校の徳育を助成するところか却って破壊の恐れすらある。円了は外遊の経験から、西洋には「学校以外に修身を教ふる処ありて、而も其効力は学校の修身より多」いところのものに着目する。すなわち地方において果している教会の役割である。日本の現状を考えると、家庭、社会の改良をなすには「小学卒業後に、修身教育を継続する方法」を講じ、「家庭教育に先立ちて、其父兄を教育することを要す。即ち其父兄に、家庭の何たる、教育の何たるを知らしむるを要する」が、地域社会において果している教会の役割に代わる修身教会の設置によってこれを行おうとするのである。また、我国の宗教家の伝道布教は現世の道徳に重きを置かねので「修身教会を設置して、仏教其物が、現世に益する所あることを知ら」しめるともいう。

円了は確かに教育勅語を単純に肯定し、教育勅語の普及者を自称して、それに関する著述<sup>(1)</sup>も多く、修身教会の目的もそのことに定めているように述べている。しかし、円了の実際はそう単純ではないように思われる。『修身教会雑誌』の寄稿論文も教育勅語の徳目の解説に終ることはなく必ずそ

の解釈を広げるところであり、著書『仏門忠孝論一斑』(明治二十六年)も教育勅語の普及者の著述かと思われるところであるが、その内容は終始、仏教の話であって、忠孝に関わる場所は少い。円了にとって、仏教振興こそが目的であって、教育勅語はそのための手段でしかない。

要するに、修身教会の設立は、「日本全国を巡遊し、地方の宗教の振はざるを見、徳義の衰ふるを察し、……国家将来の為に聊か憂慮する所ありき、爾来之を挽回せんと欲し、……各地方に於て修身教育を設置」するところが、「今日の急務」だとしたことにある。しかし此処では「地方宗教の不振」すなわち仏教の不振については直接に語っていないが、その後の円了の活動内容は仏教の振興を通しての道徳の活性化にあったといえよう。

維新以来の「百般の進歩発達」には見るべきものがあるが、「国勢民力」にいたっては西欧のはるか下にある。それは「我国民の道義徳行の彼れに及ばざる所あるに由る」からである。忠孝については一般に熟知されているが、軍人勅諭、教育勅語、教科書等で教える「其忠たるや多くは戦時の忠にして、平日の忠にあらず、其孝たるや極端の孝にして、通常の孝」ではない。それ故、「民力を養ひ国勢を隆ん」にすることができないのも、「忠孝の未だ其意を尽くさざる」ところにあるといえる。円了はここにおいて、勅語などによる政府主導の「忠孝」に対して、単にそれに「拳拳服膺」するのではなく、庶民の日常生活に対応するものに解釈し直している。勅語で教える「忠孝」は、単に戦時の極端な例で示されるようなものではなく「小にしてはよく其身を修め、其家を斉へ、之を大にしてはよく社会国家を富強ならしむる」ものであって、その中に「儉約、勉強、忍耐、誠実、信義、博愛、自重等の諸徳」を含むものだという。これらは庶民の日常生活

活上の徳目であるが、これらの諸徳の実行において西欧に劣るというのであり、それ故、「今日の急務は此諸徳を養成する方法」を講ずることにあるというのである。そこには「勅語」を通して下賜された徳目よりも庶民生活日常の徳目を重視する姿勢があるといえる。この庶民生活のうちに道徳の頹廃があるとしても、それは何によるのか。長年にわたって諸制度の完備、軍艦購入、国有地の造成、皇室財産の肥大化のために地租改正を強行して苛斂誅求をなして農村を疲弊させて来た政府によるのではないのか。しかも農村の自立はその後、篤農家たちの努力とより一層の苛酷な労働とによって、かろうじて果される自力更生にのみまかされているのではないのか。

#### 四

そもそも「教育勅語」の作成は、国会開設の時期を明治二三年と決定（明治十四年）して以来、自由党、立憲改進黨等の政党樹立あいつぐ中で、集会条例の改正（政治結社の支社設置、結社間の連合の禁止）による民権弾圧の強化があり、朝鮮京城には反日暴動（壬午事変）が起る。明治十五年、地方官に対して軍備拡張の詔勅が下され、それと共に地方官会議では徳育の重要性が主張されている。それ以来、徳育強化が地方官会議の懸案事項となっていたが、国会開設が予定されていた明治二三（一八九〇）年二月十七日から開られた地方官会議の席上での発案によって「教育勅語」の作成が始まったとされている<sup>(12)</sup>。元田永孚、井上毅らの手を経て、十月三十日、第一回帝國議會召集（十一月二五日）の直前に発布され、翌三十一日芳川顯正文相によって「殊ニ学校ノ式日及其他便宜日時ヲ定メ生徒ヲ会

集シテ勅語ヲ奉読シ且意ヲ加ヘテ淳々誨告シ生徒ヲシテ夙夜ニ佩服スルノ所アラシムヘシ」という訓令がなされた。それは一見、学校における道徳教育を目指しているように思われるが、その作成の背景、特に帝國議會開設の直前に発布したのかを考えると政治と無関係ということとはできない。「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ」に始まる道徳の徳目が天皇により下賜されたということとは、道徳の価値、徳目の優先順位、忠孝の絶対性が既に天皇制国家によって強行されることを意味するものである。従って、教育勅語に対する批判、反論は道徳上の批判、論争となり得るものではなく、直ちに天皇に対する「不敬」という形で封ぜられるのである。教育勅語発布同年十二月二十五日に下附された第一高等中学校では、翌一月九日に奉読式が行なわれたが、そのとき「勅語」に対して深く拝礼しなかったという事由で起ったのが「内村鑑三不敬事件」であり、内村を弁護した木村駿吉も内村ともども免職となった。これを契機にキリスト教攻撃が起り、所謂「宗教と教育の衝突」となっていくのである。ここでの問題は、教育勅語による道徳とその教育が形骸化したということであろう。円了はこのことを含めて「国民の道徳を維持せんと欲せば、必ず学校以外に修身を教ふる道」が必要だというのであるが、それはもとより国家が要求していたようなものではない。円了は「教育勅語」の普及者を自認するが、それは決して勅語の意図にある臣民化を計ることに加わるのではなく、あくまでも「国民に吾人の平常守るべき諸般の道徳を知らしめ且つ行わしむる」<sup>(13)</sup>ことにあったのである。

円了はそのために次のようなことを提案している<sup>(14)</sup>。(1)我國の宗教の勢力は微弱であり、これに道徳教育を一任することはできぬが、道徳教育には

宗教が必要なので、宗教を改良する。宗教の改良は宗教人の改良である。

(2) 一国の道徳は国民の多数によって成立つのであるから、その大多数を擁する中流以下の人から道徳教育を始めるのが適當であり、その目的のために宗教の力を借りるのがよい。(3) 国内到るところに存する寺院に人民を集め、僧侶によって修身講話を行わせる。(4) 仏教も世間教、世間道を説き、世間の道徳教育に任すべきこと。(5) 宗教と教育の対立衝突が社会道徳の妨害ともなっているので、相互に一致協同して国民道徳に力を尽すべきこと。(6) 修身教会の組織は各町村一同の協議により、すべて町村の自治にまかせ僧侶と教員を講師とする。(7) 結婚式等も修身教会の席で行ない、冗費を省く、これによって町村一般の風俗習慣を改新すべきこと。(8) 教育の進むに従って「坐食」を好み、「力食者」を減ずる」傾向があるので、実業教育に先立って青年の性質氣風を矯正する必要がある、「工場教会、病院教会」の設置を考えるべきであること。(9) 我国には未だ図書館の充分なる設置がないので、修身教会に図書館を設置すべきこと。(10) 修身教会の設置は地方村落から始め漸々都会に及ぼすべきこと。(11) 修身教会は各町村の自治によるのであり、本部を置いて統轄する必要はないが、各教会の連絡、教会通信のため「修身教会雑誌」を発行して、その必要に応ずると共に講話材料等を提供する。

この提案のうち、(6)の各地方町村の自治によるべきとの提案は重要である。明治政府は教育、徴兵、納税の体系を樹立を中軸にして地方自治を否定しつつ統合の道を辿っているのに真っ向うから対立する小結社主義を採っているということである。そしてこの修身教会の趣旨について「余は自ら全国を周遊し、各地に於いて細説詳述」すると覚悟の程を述べてい

る。

## 五

「修身教会雑誌」は日露戦争（宣戦布告明治二十七年二月十日）に少ずかに先立って刊行された（二月一日）。このことに影響されてか、円了の執筆、講話の内、日露戦争、軍人勅諭、教育勅諭の軍人に関わる徳目に関するものが若干ある。「日露開戦と修身教会」「義勇の話」(二二号)、「出世軍人諸士を送るの辞」「軍人勅諭の話」(三三三)、「忠節の話」(四四四)、「礼儀の話」(五五五)、「武勇の話」(六六六)、「信義の話」(七七七)、「質素の話」(八八八)、「戦争と仏教の関係」(八八八)、「誠心の話」(九九九)、「忠孝の話」(十十十)、「我海軍の大捷を祝す」(十八十八)、「戦勝の結果」(十九十九)、「凱旋軍隊を歓迎す」(二四二四)である。これは三六号までの円了の執筆総数99編のうちの15編である。また「円了談叢」という雑文百十六篇のうち「日露比較」「従軍者を送る」「文武二道」「義勇奉公」がある。しかしこの「義勇奉公」にしても、兵士のそれを語るといふよりも学生の義勇奉公は「学業を研習する」ことにあるというものである。

円了の執筆したものは大別すると、修身教会の設立と普及に関連するもの、勅諭に関わるもの、啓蒙に関わるもの、戦後経営に関わるものに区分できよう。

(一) 修身教会関係の論述。(1)「日露開戦に際して各地方に修身教会を設立するの急務を述べ」(二二二)では、「露国の国情、日本の国脉、海外状況、各国形勢、義勇の心得、勤儉の注意、報国の本分、義勇奉公美譚の紹介、恤兵献金の奨励、後援内助の方法の開示」のため、修身教会設立が必要だ

と述べる。この種の主張は、戦後にも向けられる。凱旋の日は祝勝会が開られようが、その日は「飲食、遊興の必ず相伴ふあり、其風漸く流伝し馴致して風俗道義の破壊を招く恐れ」があるから、「今より教会を開設して其弊を未然に防ぐ」必要がある。「祝勝会の好機を利用すべき」である（修身教会の開設の好機「二二号」）。これは確かに日露戦争を利用していいといえる。しかし円了は戦争に便乗し好戦的言辭をはくものではない。

かえって、戦後の道德頻廃に目を向けて予防を説くのである。「戦後は一時必ず残忍苛酷の風行はれ喧嘩殴打殺人等が流行するに相違ない」「戦後の経営として社会の改良、風俗の矯正、道德の振興が急務」として美術を奨励している（「美学研究の必要」十二号）。また戦後の経営は実業の発達にあるとして実業社会の徳義の振起を論じている（「工場内に修身教会を設くべし」九号、「実業道德談」十五、十七、十八号）。さらに、農工商の平和の戦争が始まっていることを指摘しながら、話題を「人事の戦争」に進め、「内界の方は良心を開発し、人格を完成するを目的」とし、「外界の方は個人及社会の利益と幸福とを増進するを目的」とし、この両者を合して「個人及び社会の理想を実現する」というように、話題を道德に収斂させるのである（「戦争の話」二七号）。(4)修身教会は宗教と教育の両端に跨り両者を接合するものであるから、それに相応する「本山と本尊」を有するといえる。が、修身教会は各町村の自治によるのであるから各教会は全てが本山である。本尊には心の内に立てる「主観的本尊」と心の外に立てる「客観的本尊」の別がある。修身教会の本尊は「吾人の良心の命令に従うて、一身を処するものなれば、良心」すなわち主観の本尊である。修身教会は国民道德を奨励するのが目的であるから教育勅語を教本とせねばな

らぬ。勅語は忠孝為本の道德が示されたものであるから、「我等臣民に於ては、皇室」が客観的本尊である。それはいうならば「表面の本尊は皇室にして、裏面の本尊は良心」であるということである（修身教会の本尊と本山「七号」）。以上のことは修身教会の「實際上に於ける本尊と本山とを示した」ものであって、「修身其物の理想上の本山及び本尊」は「物心の本源」であり「宇宙の実体」である。この両者は「絶対の一元」であり、円了の哲学からすれば、それは「真如」であろう。これには、臣民としては教育勅語に従い皇室に対する忠を説かざるを得ぬがそれは實際的、表面のものである。これに対して教育勅語に欠けている、人間に普遍の良心、修身の理想が修身教会の本尊だとされる。その「表面」が意味するのは「国民の道德の振起、実に日本特殊の道德」ということである。それに対して「裏面」が意味するのは「世界共通の道德を實踐的に講究する」ということである。教育勅語が臣民化を目指すものとするならば、修身教会は良心を個人道德の原点となし、それによって教育勅語を超える世界共通の、人類に普遍の道德を説くものとする。誠に重要な主張といえる。

この「裏面」の意味するところからすれば世界共通の道德の「模範を海外諸国に取」ることになるが、遠い西洋諸国に共通する道德よりは、先ず近いところの「東洋就中日清韓三国共通の道德」を取るべきである（修身教会を拡張して清韓両国に及ぼさんとす「八号」）。日清、日露の両戦争において海外に軍事的に進出し、後の侵略の道を開くその時期に、円了は三国に共通する儒仏によって「彼此互に相連合して、道德の振興を計るべき」だと主張するのである。この主張に基いて、円了は修身教会の旨趣を清韓に伝えて入会を勧めるに至るのである。<sup>(15)</sup>

(二)勅語関係。教育勅語については、維新以来、西洋文明を受容したため「旧来の事物と入り変り新しき日本国が出来」たことによって「日本に固有せる道徳までも、一時はなくなりさうの勢い」であつたため下賜されたとの理解に立っている。国民の守るべき忠孝二道を本とする道徳を「皇室より定め給へるが如きは、世界万国に比類なきことにて、他国の人より視れば、如何にも不思議の様に思はるゝことなるも、此点が日本の日本たる特色」だとし、それは日本が「皇室を中心とし根本とし基礎として建てたる国……皇室ありて後に人民が出来たので、其人民は皇室の分家末孫より分れたもの……皇室は君主の家にして又先祖の家、……皇室と国民とは一家血族の間柄」だという家族国家観に立つて忠孝を「家訓」、自然の感情によつて受け入れている。ただ注目すべきことは、数多く「修身教会雑誌」に執筆しているなかで、この教育勅語の場合にのみ、例えば、「家訓を、我々国民が守ることになるのぢや」というように「……ぢや」という文体を取っていることである。何故であらうか。円了は哲学者として外国人の理解をこえる点を「日本の日本たる特色」といわざるを得ぬことを恥じ、不合理を押し切るために、文学博士、哲学館大学長の権威、肩書きを以つて、しかも語らねばならぬことを語り得ず、語り得ぬことを語らねばならぬとき、偉らぶった口調をとらねばならなかったのではないのか。そう考えねばならぬ異様な口調である。そう考えるのは、教育勅語を絶対的に肯定しているように見せながら、その眼目は「徳の一字」にあるとし、「徳ヲ樹ツル」というように徳を樹木に喩えていることから、その「徳の樹は、何れの地に植てあるか」と問うているからである。その徳が植えられているのは「心」だという。「日本人の心の畑に植てある」と答える。そ

して徳の成長發育には「雨露、肥料」が必要であるが、それは神儒仏三道だとして、円了の世界に問題を引きもどすからである。そのことは、教育勅語に示される「義勇奉公」が戦時の兵士のそれを思わせるのに対して、円了は、義勇奉公が身分、職業に応じて「軍人にあらざるものは、家事を始め、業務を励」むこともそれに当ると述べていることからいえると思われる。

(三)啓蒙に関して。このことについては、円了は実に多くのことを語っているが、ここでは一つの論述にのみ限ることにする。それは日本人の無宗教、喧嘩、風俗、虚礼、迷信などについて述べている所であるが、その「喧嘩」にふれて、戦時中に、日本人は「戦争的国民と評される、武勇の氣象が余り狭隘に過ぎて、怒り易く立腹し易く衝突し易きの弊」あるは不思議として述べ、また欲心から出るものではない学生のストライキを論じて日本人の氣質に屈曲、小人的、小国的零囲氣を認めて大国的氣象を養ふ必要を論じている。何れにしても、円了にとって日本という国はどのような国であつたのであろうか。

## 六

円了が生きた明治という時代、日本という国家はどのようなものであつたのだろうか。

明治前半は「王政復古」と「文明開化」をスローガンとして新体制への途を歩んだといえる。この「復古」と「開化」という矛盾が明治という時代の基調であり、この矛盾はそれ以後、国権派と民権派の対立となつて行くが、この矛盾を止揚するのは「天皇」であつた。確かに、明治という時

代から近代化は始まったといえるが、この矛盾をもつかぎり「文明開化」の標榜によって在来の諸思想、生活様式等の一切を「旧弊」、「因循姑息」として否定し、急速な西欧化がはかられたとしても、真の意味での近代化を為し得なかった。「文明開化」という語ですら輸入のものであって自発のものではなかったが、その「文明開化」の目指したものの、そしてその結果したものを見ると、「文明開化」の原語である Civilization にそぐわないものがある。決してそこには、西欧近代が生み出した個人主義、自由主義、政治的自由（言論・集会・結社）、民主化などに支えられた市民社会、市民意識、国民国家の形成に向うものはなかったのである。

そもそも、明治新国家は所謂「王政復古」の大号令（慶応三年十二月九日）によって古代的な天皇親政にもどすことを目指すが、それは「神武創業の始に原」くこと、「至当の公議を竭」すこと、「旧来驕惰の汚習を洗」うことが謳われた。ここでも「旧弊御一洗」が謳われるが、それは旧幕藩体制に連るものをいうのであって、「文明開化」がいうのとは異質である。旧幕的なものを「旧弊御一洗」することはとりもおさず、旧幕体制下の「藩民」を「国民」にすることを意味しているはずであるが、その向う所は「国民」ではなく「臣民」化であった。西欧に習う「公議を竭」すことも、大名諸侯を会して天神地祇を祭つてなされた「五箇条の誓文」（慶応四年三月十四日）の「広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スヘシ」の「公論」も、字面の上では民主的なもののように見えるが、全くそうではなく、まして庶民を含むものではない。「徴士貢士の制」（慶応四年二月十日）より人材登用がはかられたが、それも「此の貢士なるものは国々の国論を代表すべきものにして、新政府は封建的代議政体を実行せるもの……一藩に推

されたる雄才を以て、新政府の勢力を作り、之を以て各藩を鎮<sup>16</sup>するものと見られているのであって、庶民を含めての真の「公論」を形成するものではない。しかし人民を新体制の中に取りこまなければならぬのである。それ故、「王政復古」の諭告では「近年物価格別騰貴……富者ハ益富ヲ累ネ、貧者ハ益窘急ニ至リ候趣、畢竟政令不正ヨリ所致」という形で、庶民の生活苦を生み出した幕藩体制を「旧弊」として現実的に否定したのである。そしてそれは、「太祖神武天皇既に天下を定めたまふや、……人と神とを司牧せしめたまひ、……而して土地人民悉く朝廷に帰し、天下大に治まれり<sup>17</sup>」ということと結びついて、天皇体制の正統性の根拠を古代の清浄性、天下平治と現在の生活苦に対する無関係性とに求めている。そうであるかぎり、神話に癒着する歴史の上限の清浄性と下限の間の歴史事象は全て汚であり、悪である。歴史の下限に正統として位置づけられる新天皇体制は、歴史上の悪を清浄化するものとされる。それ故、ここに現れた天皇像は「住民塗炭の苦るしみ」に「宸襟を悩ませ」ている「民の父母」、「天子様」というエモーショナルなものとして現れているのであって、そこには政治的君主としてではなく、神話的権威、家父長的権威があるだけである。親政が幕政を否定する論理を現実的なものにしようとするかぎり、最も庶民的な関心である「物価騰貴」を掲げるしか途はなかったのであり親政を徳政的に理解し、そう理解させようとしていたといえる。それが、歴史に内在する単なる思想としての「天皇」を庶民生活の中に実体化する唯一の方法であった。庶民もそれ故に、「世直し」を期待していたのである。

庶民の反応はあくまでも生活的であったといえる。「今農事にもとりか

かり、またかひこのいそがしき折からに候へば、戦争のはじまりますれば百姓のなんぎになり、国産のじゃまにもなり」と、<sup>(18)</sup>当時の新聞は戊辰戦争に対する庶民の反応を明確に伝えている。それは「ふかき御仁恵の叡慮のおもむきおふれにはたびたびおほせいだされたれども、……まことの主上のおほしめしにはあるまじき」として、戦争を嫌悪し体制的発言には懐疑的ですらある。そして「主上のまことのおほしめしをも万民にしらせ、万民はありがたき皇化に沐浴し、太平の御代をたのしませて」欲しいもの、「はやくもとの太平にしてくださいまし」と、徳政的期待をもつて、その具体的実行を願っている。しかしそれが期待されたものでないことが明らかになったとき「世直し一揆」等が激発するのである。

## 七

新政府は「天下の権力すべてこれを太政官に帰す。すなわち政令二途に出ずるの患なからしむ」と政体書（慶応四年）によって中央集権政府たることを宣言したが、それは従来の分散、孤立していた藩民意識を統合することが前提であるがその鍵は「天皇」であった。しかしいまだ藩民意識が濃厚で、「天皇」が何であるかを知らぬ状況にあるとき、「天皇」が何であるかを直接人民に教えねばならなかった。そのために行なわれたのが天皇の巡幸である。

巡幸は途々物価騰貴に苦しむ庶民生活を見、孝子節婦等の表彰、「忠魂」の顕彰を行ないながら、天皇が常に身近かに存するとのイメージを喚起するため、庶民的な、いわば土臭い地方に「天皇」を土着させ、人心を収攬するものであった。それが巡幸の<sup>(19)</sup>果した役割である。しかしその巡幸

も、政治状況、社会状況の変化に応じて、当初の孝子等々の表彰から、より一層政治的效果をねらったものとなり、民権運動、地租税反対運動の昂揚、激化の時期と運動激化の地方とに集中し、各地の豪農、名望家、師範学校を歴訪する性格を見せている。それに応じて「天皇」の性格も変っている。

何れにしても、天皇の巡幸は「それ自身が天皇の権威とありがたさを、おおいに人民にしみこませる政治的、思想的デモンストレーションであった。その効果をさらに高めるために、天皇は、沿道の孝子、節婦をえらんでこれを褒賞し、七十歳以上のすべての老人には慰問の金品をあたえて、また水災、兵火などの罹災者に見舞金を分け、あるいは稲刈りの農民も、網引きの漁民の働いている場所に臨むなどして民衆を感化させた<sup>(20)</sup>」という意味のものである。

新体制の創成は、天皇制を主軸にした中央集権的官僚機構、地方統治機構、収税機構を整備、拡充し、全国土全人民を政府が画一的に支配することから成り、それらを保障するものとしての軍事、警察、治安立法の強化が「公」の側の動きであるのに対して、世直し、徴兵、義務教育、地租改正反対の一揆、民撰議院設立をめぐる士族民権家指導の運動、やがては広範な豪農層から農民を主体とする民主化の運動へと高まる民衆、「私」の側の運動があり抵抗があった。それは人民の自由と平等の確立を以て民主主義の根本となし、人民の力によって国の独立を達成維持しようとする自主独立の運動であったといえる。それは民撰議院設立請願運動以後、それを一層深化、展開して下流市民、農民にまで拡大して行く民権運動である。その時々<sup>(21)</sup>の政治問題（国会開設、憲法、地租改正、徴兵、条約改正、

開拓使払下げ等）に対応して、その運動形態と指導者層及び主体とが変わることがあるにしても、その現実の運動エネルギーが次第に底辺にまで広がったことが重要である。その基底には専制政治に対する批判があり、今や簡単に天皇体制にからめ取られぬ農民がいるのである。民権運動の武器となったものは、新聞、雑誌、著述、演説などであるが、此処で注目されねばならぬのは、各地に小結社が多数できたこと、地方遊説のその数の多さである。演説会に集まる農民の増大は農民の自覚の高まりを示すものである。しかし民権家はこの自覚的な農民大衆と連帯するよりも自らの士族・豪農的立場に立った為、民権運動は結局は失敗する。いうならば、民権運動期の天皇の巡幸も民権家の地方遊説も地域の指導者たる中小豪農の奪い合いであったといえよう。これに対して、円丁の巡講は農民大衆の許に進むものであったといえる。

明治十年代の政治状況は絶対主義的な国家の変革<sup>(21)</sup> 国会開設<sup>(22)</sup> 立憲政体樹立の目標が諸運動を結合していたといわれる。その政治状況が演説会の流行、新聞社の発展をもたらした。

例えば、沼間守一の嚶鳴社は各地に支社（明治十三年、東日本に二九社）を設立し、地方遊説を重ねた。明治十四年十一月から十五年六月の八カ月に東日本九県一一五回、また東京在住民権派ジャーナリストの東京外、関東一円の遊説回数二五九回と数えられている。国会開設請願の運動は「国会期成同盟」を発足（明治十三年三月）させたが、その第二回大会（同年十一月十日）は、二四府県六七名が集り、全国十三万五千の請願委託者を代表した。これは在村的潮流の進出を示すもので、所謂豪農民権運動となつて地方団結を固め、人民憲法草案作成の方向に向つたのである。<sup>(23)</sup> 植木枝

盛の「日本国憲按」の各条は、「日本国民及び日本人民ノ自由權利」を規定しているが、第71条「政府官吏压制ヲ為ストキハ日本人民ハ之ヲ排斥スルヲ得、政府威力ヲ以テ擅恣暴虐ヲ逞フスルトキハ日本人民ハ兵器ヲ以テ之ニ抗スルコトヲ得」、第72条「政府恣ニ国憲ニ背キ擅ニ人民ノ自由權利ヲ残害シ建國ノ旨趣ヲ妨グルトキハ日本国民ハ之ヲ覆滅シ新政府ヲ建設スルコトヲ得」とまでいいきるものである。「公議与論」を国是とするかぎり、自由民権運動の「民選議院設立」要求は必然である。

このような人民主権に立つ政治意識の昂揚を政治危機と捉える政府はこれを打開するため、明治二三年を期して国会を開設する旨の詔勅が出された（明治十四年十月十二日）。しかしそれには、「若し仍ほ故さらに躁急を急ひ、事変を煽し、国安を害する者あらば、処するに国典を以てすべし。特に茲に明言し、爾有衆に諭す」とあるように、民権運動の弾圧（集会条例改正、請願規則）の激化を伴うものであった。が、これに対する自由党員の反政府運動も激発した。自由党結成後、41府県に一四八の政社名があげられ、十五年夏にかけての全国演説会の開会数は一八一七、演説者は七六七五名をかぞえるのである。<sup>(24)</sup> この運動を指導した多くは各地方の豪農名

望家であり、天皇巡幸も民権派の各地演説会も、これらの名望家を相互に取りこみ、人民の深部にいくこもうとするための攻めぎ合いであった。しかし、民権派が底辺民衆エネルギーを吸引し、政治力とすることに對する政府の弾圧は熾烈を極めた。自由党員による蜂起が相いつぎ、デフレ政策と増税を軸とする松方財政強行の中で没落に類した農民の「地租軽減、諸税廃止、徴兵令廃止、貧民救恤、質地返還」を要求する農民蜂起も激発した。「政府が幾何の改革を為すも、幾多の法制を改むるも、民間党の希望

なるものは一分も行はれず、皆一挙して条約改正を遂げんとする政略の結果として、一に外人の歓心を買はんとして為され、凡べての政略は自由主義の前路を遮り、政府が民間党を顧みざる殆んど無人の地を行くが如きものでありて、欧化主義の名を以て知られたる社会上に於ける貴族的急進政略と、制度政略の名により知られたる政治上に於ける貴族的保守的政略は、明治二十年を以て其極点に達したり」といわれる。<sup>(25)</sup>

## 八

「貴族的急進政略」とは「日本の物質的の進歩を示して、以て外人の歓心を買ひ、速かに条約改正を遂げんとせる」ことで、所謂「鹿鳴館」に象徴されるものである。また「貴族的保守政略」とは「法文により宮廷の勢ひにより社会の秩序を調へんとする」ことである。しかしこの両政略により推進された条約改正案に対しては司法省備のボアソナードがその危険不利を上書するなど、政府内外の反対にあつて条約改正会議の無期延期を各国公使に通告するに至つた（明治二十年七月二十九日）。これに対して総理大臣伊藤博文は、地方官會議において「抑も我国に於て上祖宗の神器を永遠不侵の地に置き皇室の乾綱を維持し、下臣民に向て代議の權利を附与せんとするは、是れ神祖以来国体の大事にして皇家継述の宏謨に係る。而して臣民何人か敢て之を私議することを得んや、今の時に當り憲法發布の前或は後に於て敢て憲治の親裁を異議するものあらば、断じて言論集会及び請願の自由の範圍の外に出る者とし、若し或は此を以て名として暴動を謀り、又は教唆するものあらば治安を維持するが為に臨機必要なる処分を施すべし」と述べ、後の憲法の骨格をなす天皇不可侵によつて、言論の自由

を断固抑さえこむことを命じた。さらに語をついで「宇内の大局と國家の長計を問うときは、我が國民は重荷を負担し、重苦を忍耐して、以て現在及未來の爲めに國光を維持することを務めざることを得ず、故に人民をして租税及兵役の二大義務を尽すことを怠らしめず、以て帝國忠愛の臣民たることを証明せしめ<sup>(26)</sup>」よというのである。「重荷を負担し、重苦を忍耐」することが臣民たることの証とされたのである。さらに續いて保安条例の公布（明治二十年十一月二五日）の翌朝には、片岡健吉、尾崎行雄、中江篤助、竹内綱ら五七〇余名が東京から追放あるいは拘禁されたのである。これらの圧制手段を準備した上で、樞密院を設置（明治二十二年四月三日）し、憲法草案の審議が進められ、明治二十二年二月十一日、「我が臣民は即ち祖宗の忠良なる臣民の子孫なるを回想し」と勅語が朗読されて、憲法が総理大臣黒田清隆に授けられたのである。憲法の目ざしたところは、「憲法二一章臣民權利義務」に要約される。そこに要約されたのは憲法を作る土台としての市民及び市民権ではなく、全ては「法律の範圍内」で自由を附与されて臣民となつたということである。これは植木枝盛の「日本國憲按」の各条に示されるような「人民とその權利」の差が大きければ大きいほど弾圧は大きいといふ。様々な形での弾圧機構を備えて強行された臣民化の道は教育において最も顯著である。

円了はこのような政治的、社会的激動期の明治二〇年に哲學館を設立したのである。明治十九年帝國大學令によつて、東京大學は帝國大學と改称されたが、これが日本における唯一の「大學」であり、多くのものには門が閉ざされていたその翌年にである。その意味するところは大きいといえる。

明治政府による大学創設は、幕府から継承した昌平学校（昌平坂学問所）を改称、明治一年六（九月）を「大学校（本校）」とし、開成学校（開成所）と医学校（医学所）を「大学校分局」としたことに始まるが、この大学校の創設旨趣は、<sup>(27)</sup>「神典国典ノ要ハ皇道ヲ尊ミ、国体ヲ弁スルニアリ。乃チ皇国ノ目的学者ノ先務ト謂フベシ。漢土ノ孝悌彝倫ノ教、治平天下ノ道西洋ノ格物窮理開化日新ノ学、亦皆是斯道ノ在ル処、学校ノ宣シク講究採扱スヘキ所ナリ」ということであって、国学（皇学）を中心とし、漢学、洋学を含む総合大学とを目指しての設立にあった。しかし、「大学校（本校）」の目的は、「神典国典ニ依テ国体ヲ弁ヘ兼而漢籍ヲ講究シ、実学実用ヲ以テ要トス」ることに置いて、国学を根幹とした「国体弁明」を主とし漢学を従属的に位置づけている。しかし、明治十年四月、東京大学となり文科大学が新設されるとき、史学、哲学、政治学を第一科、和漢文学を第二科とした。この改正は日本在来の伝統的文化を擁護、育成することに加えて、近代化を急ぐときに要求されていた西欧技術文明の輸入に傾斜していた大学に西欧近代を生み出した形而上学的文化の導入を行わせることになる。しかし、明治十五年には古典講習科（三年制）を設置し、和漢の古典歴史等の知識を教授することになる（十八年まで）ように、民権運動の昂揚に対応して、伝統文化重視の姿勢もうち出されるところである。円了はこの時期に西洋哲学を学んだのである。

明治十九年の帝国大学令は、「帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トス」（第一条）ることを規定した。これは一見、高踏的なニュアンスを示しているが、その実体は大学

の機能を国家目的に従属させると共に「官許の学」を以て学とするという枠の内で學術技芸の教育と學問研究を大学の目的としているということである。全体的にいうならば、教育の国家主義化と學問の合理的認識、実践主義とを制度化したことになる。この三つの傾向によって、大学をして文官官僚養成機関としたのである。何れにしても、明治三十年京都帝大、明治四十年東北帝大、明治四三年九州帝大が日清戦争後の産業化のために設立されるまで、東京帝大が日本唯一の、官立の、したがって官許の大学であった。

このような状況の下で、井上円了は明治二十年に哲学館を開設する。その「哲学館設立旨趣書」（明治二十年六月）によれば、「哲学ハ百般事物ニ就テ其原理ヲ探リ其原則ヲ定ムルノ學問」ではあるが、「当今哲学ヲ専修スルヲ得ルハ、独リ帝国大学ニ限り、世間復タ之ヲ教ユルノ学校アルヲ聞カ」ぬところである。それ故、「晩学ニシテ速成ヲ求ムル者、貧困ニシテ資力ニ乏キ者、洋語ニ通ゼズシテ原書ヲ解セザル者」は哲学を窺うこともできぬところにある。それ故、「世ノ大学ノ課程ヲ經過スルノ余資ナキ者、並ニ原書ニ通ズルノ優暇ナキ者ノ為メニ哲学ノ階梯ヲ設ケ」るというのである。しかし、それは「帝国大学文科大学ノ速成科若クハ別科ニ当ルベキ程度ノモノ」であつたが、そのような意味での学校設立は表面の目的ではない。「其裏面ニハ二種ノ意」を含んでいたのである。すなわち「其一ハ宗教ヲ振起スルコト、其二ハ哲学ノ必要ヲ世人ニ示スコト」<sup>(28)</sup>にあつたのである。それは排仏毀釈によって切り捨てられた仏教をいまなお信仰とする庶民、哲学を象徴とする高等教育への道を閉ざされた庶民、何れにしても体制外に放置されている庶民を含めての「専門ノ独立ハ共ニ国家ノ独立ヲ期

スルコト」を意味している。そのためには、これらの庶民啓蒙に当るものの養成が必要である。すなわち哲学館の目的は「文科大学ノ速成ヲ期シ  
広ク文学、史学、哲学ヲ教授スルニアルモ、就中教育家、宗教家ノ二者ヲ  
養成スル」にあり、「其方針トスル所ハ教育ノ方ハ日本主義ヲ取り、宗教ノ  
方ハ仏教主義ヲ取ルコト」とするといわれる。この場合の日本主義とは、  
お儒い外国人教授の故もあつて教授上、日本語すら用いなかった「当時我  
邦ノ諸高等学校ノ西洋主義ヲ取レルニ反対」してのことである。<sup>(29)</sup>また知識  
の普及としては、翌明治二十一年以来現今の通信教育制度にある「館外生制  
度」を設け地方青年の教化をも行なつた。<sup>(30)</sup>そのために円了自身も哲学者と  
してよりは啓蒙家の色あいが濃くなり、専ら哲学の通俗化、哲学の実行化  
へと進むのである。しかしこの仕事の中心にある哲学館も「其創設の主旨  
は哲学を世間に普及するにありて、最初は飽くまで通俗本位なりしも、時  
の勢に誘はれ風潮に動かされ、自然に高尚に傾くようになりて、遂に大学  
専門科まで開設するようになって来た」<sup>(31)</sup>とき、円了は哲学の通俗化という  
目的は達したとして、大学を解散、辞任して「修身教会」に活動の場を移  
そうとするのである。

円了は明治三十九年一月、病氣を理由に哲学館大学々長を辞任する。しか  
し、真の理由は「哲学館創立の初志は、広く世間の人に哲学の何物たるを  
知らしめんとするにありて、其目的は今日既に達し得たりと思へば、学校  
組織を解散して、講習会組織に変成するに如かずと考え、其内意を二三の  
人に謀りたることありしも、誰も之に同意するものなければ、自ら継続の  
止むを得ざるものと決心し」<sup>(32)</sup>たことにある。これによると円了の本意は大  
学の経営よりは「修身教会」を通しての地域活動にあったといえる。それ

は病氣を理由に大学を辞任したにも拘らず「修身教会の拡張に就きては、  
病中と雖も従前の如く、力を尽さんと欲するなり」<sup>(33)</sup>と述べ、従来のように  
全国巡講に出かけていることから明らかである。

## 一〇

円了は明治二十三年以来、全国巡講を行なっているが、その巡講の目的は  
明治二十三年と三十八年は哲学館拡張のためであり、明治三十九と大正八年（没  
年）の間は修身教会普及のためというように二分されるが、その巡講の内  
容、方法には変化はない。当初、巡講の記録、日記等は「修身教会雑誌」  
に発表されていたが、明治四十一年以来、その巡講の記録が一括されて、  
『南船北馬集』として編まれ、大正八年初めまで、十六集を数えている。

それによると巡講は、各地方の寺社、名望家、卒業生宅を拠点にして、  
一、二日毎に移動し、寺社、学校を会場に、村民、生徒、婦人会等の各種  
団体に対して講演を行なっている。一日二回行なうことも多かった。また  
各地に設立された修身教会に出席して祝辞を述べること多かつた。講演  
題目は「詔勅修身、哲学宗教、実業、妖怪迷信、教育、雑題」に大別され  
る。

この『南船北馬集』は明治人が三十余年にわたって日本全国、朝鮮半  
島、満州で行なつた講演記録であるとともに、巡講途上で見聞したもの  
（方言、伝説、迷信、人情風俗の比較）、各地の景観を記し、又その折々の  
所感を漢詩に托しており明治人の教養の一端をも伺えて誠に興味深い紀行  
となっている。その内容と円了の苦勞とを知るために、その一日を紹介す  
る。

円了巡講表

| 巡講年月日 (明治)         | 巡 講 方 面               | 府県   | 市 | 郡   | 町村 | 箇所  | 席   | 日数   |
|--------------------|-----------------------|------|---|-----|----|-----|-----|------|
| 23. 11. 3~ 12. 15  | 静岡, 愛知, 岐阜, 滋賀, 三重    | 5    | 6 |     | 21 |     |     | (43) |
| 24. 1. 31~ 4. 1    | {静岡, 滋賀, 和歌山, 徳島, 高知, | 7    | 6 |     | 23 |     |     | (30) |
| 〃 5. 11~ 6. 19     | {愛媛, 香川               | 4    | 2 |     | 24 |     |     | (40) |
| 25. 1. 21~ 3. 6    | 京都, 兵庫, 鳥取, 島根        | 4    | 2 |     | 23 |     |     | (45) |
| 〃 7. 17~ 9. 6      | 山形, 青森, 秋田, 岩手        | 4    | 5 |     | 30 |     |     | (47) |
| 〃 12. 21~26. 2. 28 | (無記)                  | 7    | 6 |     | 11 |     |     | (70) |
| 26. 4. 5~ 4. 9     | {山口, 福岡, 熊本, 長崎, 佐賀,  | 1    |   |     | 5  |     |     | ( 5) |
| 〃 4. 20~ 6. 2      | {宮城, 大分               | 1    | 1 |     | 33 |     |     | (44) |
| 〃 7. 19~ 9. 4      | 群馬                    | 3    | 1 | 3 区 | 15 |     |     | (48) |
| 29. 3. 24~ 5. 10   | 新潟                    | 1    | 1 |     | 35 |     |     | (58) |
| 30. 7. 23~ 8. 7    | 北海道, 福島, 宮城           |      |   |     | 3  |     |     | (16) |
| 31 (秋)             | 長野                    | 2    |   |     | 15 |     |     |      |
| 32. 7 月中10日間       | 宮城, 茨城                | 1    | 1 |     | 44 |     |     | (10) |
| 〃 7. 20~ 9. 2      | 長野                    | 1    |   |     | 45 |     |     | (45) |
| 〃 11. 7~ 12. 9     | 新潟                    | 1    |   |     | 25 |     |     | (32) |
| 〃 (不詳)             | 静岡伊豆                  | 3    | 1 |     | 9  |     |     |      |
| 33 (春)             | 埼玉, 千葉, 栃木            | 1    |   |     | 39 |     |     |      |
| 33. 7. 18~ 9. 2    | 新潟                    | 1    |   |     | 43 |     |     | (47) |
| 〃 (秋)              | 石川県能登                 | 1    |   |     | 12 |     |     |      |
| 〃 11. 17~ 12. 31   | 長野                    | 2    |   |     | 28 |     |     | (46) |
| 34. 2. 18~ 3. 20   | 和歌山, 奈良               | 3    |   |     | 24 |     |     | (31) |
| 34 (夏)             | 志摩, 伊勢, 和歌山           |      |   | 2   | 60 |     |     | (69) |
| 35. 2. 18~ 3. 27   | 富山                    | 2    | 1 |     | 41 |     |     | (38) |
| 35 (春)             | 兵庫                    | 1    | 1 |     | 34 |     |     |      |
| 〃 5.               | 石川                    | 4    |   |     | 22 |     |     |      |
| 〃 7. 23~ 8. 7      | (無記)                  | 1    |   |     | 40 |     |     | (16) |
| 37. 1. 15~ 1. 31   | 福井                    | 1    | 1 |     | 14 |     |     | (17) |
| 〃 7・8月             | 山梨                    | 2    |   |     | 3  |     |     | ( 3) |
| 38. 7. 24~ 9. 4    | 群馬(桐生), 茨城(結城, 北条)    | 5    | 2 |     | 10 |     |     | (43) |
| (年不詳)              | 静岡, 山口, 佐賀, 長崎, 茨城    | 1, 5 | 4 |     | 28 |     |     |      |
| 39. 4. 2~ 4. 3     | {東京, 群馬, 栃木, 千葉, 神奈川, |      |   |     | 1  |     | 2   | 2    |
| 〃 4. 4~ 5. 23      | {山梨                   | 1, 2 |   |     | 37 | 53  | 102 | 50   |
| 〃 6. 13~ 6. 26     | 神奈川(秦野町)              | 2    |   |     | 4  |     | 10  | (14) |
| 〃 7. 8~ 8. 16      | 大和, 吉野, 京都, 宇治        | 2    | 2 | 7   | 28 | 38  | 87  | (40) |
| 〃 8. 18~ 8. 25     | 栃木(足尾), 新潟(長岡)        | 1    |   |     |    |     |     | 8    |
| 〃 8. 25~ 10. 27    | 香川, 長崎                | 1    | 2 | 1 島 | 29 | 46  | 116 | 62   |
| 〃 10. 28~ 11. 28   | 長崎で仏教講義 夜公開演説         | 1    |   | 7 郡 | 7  | 14  | 18  | 27   |
| 40. 1. 27~ 2. 15   | 長崎 壱岐                 | 1    |   | 2 区 | 10 | 12  | 21  | (20) |
| 〃 2. 18~ 3. 23     | 朝鮮, 満洲                | 1    | 1 | 2 郡 | 10 | 34  | 51  | 80   |
| 〃 3. 23~ 5. 6      | 沖縄, 鹿児島               | 1    |   |     | 8  | 37  | 59  | 98   |
| 〃 5. 7~ 6. 24      | 鹿児島                   | 1    |   |     | 9  | 36  | 48  | 100  |
| 〃 7. 21~ 11. 12    | 宮崎                    | 1    |   |     | 37 | 63  | 123 | 216  |
| 〃 (不詳)             | 大分                    |      |   |     |    |     | 21  | 131  |
| 41. 1. 29~ 2. 19   | 北海道南部, 東南部・中央樺太       |      |   |     |    |     | 28  | 52   |
| 〃 2. 20~ 3. 11     | 沖繩 (第16集の追加分)         |      |   |     |    |     | 22  | 43   |
| 〃 3. 12~ 6. 8      | 福岡                    | 1    | 1 | 12  | 87 | 106 | 202 | 89   |
| 〃 6. 9~ 6. 13      | 福岡 (博多)               |      | 1 | 1   | 1  | 8   | 10  | ( 5) |
| 〃 6. 16~ 6. 22     | 日光, 会津                |      |   |     |    |     |     | ( 7) |
| 〃 6. 24~ 7. 31     | 佐賀                    | 1    | 1 | 8   | 33 | 52  | 88  | (38) |

| 巡講年月日 (明治)   | 巡 講 方 面   | 府県                                      | 市  | 郡  | 町村   | 箇所   | 席   | 日数   |
|--|---|---|--|--|--|--|---|--|
| 41. 8.12~ 11. 3<br>(明治41年総計)   | 福岡<br>その帰途、播州明石町<br>" 京都伏見町   | (8)                                     | 4<br>6   | 10<br>46   | 74<br>236  | 95<br>315  | 185<br>586  | (84)<br>( 1)<br>( 1)<br>(269)                                |
| 42. 1.29~ 2. 4<br>" 2. 5~ 4.13<br>" 6. 3・4<br>" 4.14~ 8. 1<br>" 11.11~ 11.25<br>" 12.24<br>(明治42年総計)                                       | 兵庫<br>愛媛、島根<br>島根(隠岐島)<br>鳥取西伯郡(途中一時帰京)<br>清水町、大島<br>埼玉熊谷   | 1<br>1<br><br><br><br>(6)               | 1<br>1<br><br><br><br>3                        | 2<br>12<br>1島1郡<br>1島1郡<br>2島28                      | 4<br>66<br>2<br>78<br>5<br>1<br>(156)                        | 8<br>83<br>2<br>95<br>5<br>1<br>194                          | 17<br>146<br>4<br>185<br>11<br>1<br>364                           | 6<br>69<br>2<br>88<br>9<br>1<br>175                          |
| 43年統計(第5篇所収)<br>11.21~ 12. 5<br>2.12~ 3.14<br>3.20~ 5.15<br>~ 5.26<br>6.30~ 8. 2<br>8. 2~ 8.22<br>8.26~ 10.17<br>10.22~ 10.30<br>(明治43年総計) | 東京近県<br>八丈島、父島、母島、小笠原<br>千葉<br>鳥取、三重<br>同上往復諸県<br>長野南部(信州)<br>{富山(飛騨)<br>富山(越中一部)<br>岐阜、富山(美濃東部、越中、飛騨)<br>福島、兵庫一部 | <br><br><br><br><br><br><br>1<br>1<br>6 | <br><br><br>1<br>3<br><br>1<br>1<br>6          | 2<br>3島<br>6<br>6<br>12<br>4<br>3<br>9<br>5<br>3島47  | 2<br>7<br>28<br>36<br>20<br>34<br>12<br>46<br>11<br>197      | 2<br>8<br>32<br>45<br>29<br>40<br>16<br>53<br>16<br>244      | 2<br>12<br>60<br>86<br>50<br>79<br>38<br>106<br>27<br>463         | 2<br>(15)<br>31<br>42<br>25<br>33<br>17<br>2<br>67<br>(234)  |
| 44. 1. 7~ 2.21<br>~ 2.26<br>45. 1月~ 7月<br>" 7.30~ 10.22<br>大正1.10.31~ 11.18<br>" 11.22~ 12.14<br>" 12.15~ 12.27<br>(大正元年総計)                | 台湾<br>帰路、山陽道<br><br>埼玉<br>兵庫(武庫郡)、但馬<br>福島東部(浜通り)<br>淡路島  | 2<br><br>1                              | 1<br>2<br>1<br>1<br>3                          | 9庁<br>5<br>5<br>4<br>2<br>21                         | 27<br>1<br>5<br>16<br>22<br>83                               | 33<br>3<br>11<br>28<br>31<br>104                             | 57<br>7<br>12<br>56<br>39<br>26<br>192                            | (41)<br>(34)<br>26<br>18<br>22<br>12<br>(153)                |
| 2. 1. 4~ 1.28<br>" 1.29~ 2.29<br>" 3. 1~ 3.13<br>" 3.14~ 5.18<br>" 6.24~ 9. 1<br>2. 9. 9~ 10.28<br>" 11.16~ 12.29<br>(大正2年総計)              | 埼玉<br>徳島<br>兵庫<br>広島<br>帰路、能登<br>広島<br>静岡(浜松)<br>下関市<br>山口<br>大阪<br>山口  | <br><br><br><br><br><br><br><br>1<br>7  | 1<br>1<br>1<br>1<br>1<br>1<br>1<br>1<br>1<br>7 | 6<br>9<br>6<br>8<br>8<br>1<br>1<br>6<br>1<br>7<br>51 | 25<br>10<br>13<br>53<br>1<br>59<br>1<br>48<br>3<br>46<br>260 | 25<br>14<br>14<br>58<br>4<br>65<br>5<br>61<br>7<br>53<br>310 | 50<br>25<br>27<br>115<br>6<br>125<br>10<br>118<br>10<br>99<br>589 | 24<br>31<br>13<br>56<br>63<br>2<br>5<br>46<br>4<br>42<br>286 |
| 3. 2. 5~ 3.19<br>" 4. 1~ 4.22<br>" 6.12~ 6.25<br>" 6.30~ 8.12<br>" 8.13~ 8.16  | {神奈川(足柄郡)<br>滋賀<br>三河西部、播磨東部<br>佐渡、長岡、中頸城<br>愛知<br>岐阜   | <br><br><br><br>1<br>1<br>1             | <br><br><br><br>1<br>1<br>1                    | 1<br>9<br>35<br>2<br>7<br>2                          | 1<br>62<br>11<br>14<br>40<br>2                               | 1<br>73<br>16<br>22<br>50<br>4                               | 1<br>134<br>27<br>30<br>93<br>6                                   | ( 1)<br>(52)<br>(22)<br>(14)<br>44<br>( 4)                   |

| 巡講年月日（明治）                                    | 巡 講 方 面        | 府県  | 市   | 郡          | 町村  | 箇所  | 席   | 日数    |
|--|----------------|-----|-----|------------|-----|-----|-----|-------|
| 〃 8.17～ 9.16                                 | 滋賀（湖北）         |     |     | 3          | 26  | 28  | 55  | 26    |
| 〃 10.18～ 10.29                               | 福島（石城三郡），水戸    |     |     | 3          | 12  | 12  | 24  | 12    |
| 〃 11. 5～ 12. 3                               | 茨城             |     | 1   | 6          | 30  | 33  | 62  | 29    |
| 〃 12. 9～ 12.26                               | 福島（信夫三郡）       |     | 1   | 3          | 17  | 20  | 38  | 18    |
| （大正 3 年総計）                                   |                |     | 5   | 41         | 215 | 259 | 460 | (222) |
| 4. 2.15～ 5.23                                | 岡山             |     |     | 17         | 95  | 108 | 201 | (98)  |
| 〃 6.20～ 8.28                                 | 秋田             |     | 1   | 9          | 62  | 90  | 147 | 67    |
| 〃 9.29～ 10.13                                | 信越三県           |     | 1   | 5          | 13  | 27  | 42  | (15)  |
| 〃 12. 1～ 12.21                               | 栃木             |     | 1   | 3          | 23  | 29  | 50  | 21    |
| （大正 4 年総計）                                   |                |     | 3   | 34         | 193 | 254 | 440 | (201) |
| 5.2.11～3.29; <sup>4.2</sup> <sub>~4.11</sub> | 伊勢，三重          |     | 2   | 8          | 63  | 77  | 149 | (57)  |
| 〃 4.12～ 5.11                                 | 岐阜西部           |     | 1   | 7          | 36  | 38  | 74  | (30)  |
| 〃 6.19～ 9. 8                                 | 山形<br>（途中一時帰京） |     | 2   | 11         | 55  | 76  | 144 | }(38) |
|  | 新潟一部           |     |     | 5          | 6   | 7   | 14  |       |
| 〃 9.30～ 10.20                                | 中国青島省（泰山，曲阜）   |     |     | 3          | 6   | 12  | 19  | (21)  |
| 〃 11. 7～ 12. 2                               | 京都（丹後）         |     |     | 5          | 24  | 29  | 55  | (26)  |
| 〃 12. 3～ 12.18                               | 京都（丹波）         |     |     | 4          | 17  | 17  | 34  | }(16) |
|  | 京都（若狭）         |     |     | 1          | 2   | 3   | 5   |       |
| （大正 5 年総計）                                   |                |     | 5   | 44         | 209 | 259 | 494 | (188) |
| 6. 2.15～ 2.22                                | 愛知西部           |     |     | 3          | 7   | 8   | 16  | }( 8) |
|  | 神奈川（伊豆土肥）      |     |     | 1          | 1   | 1   | 1   |       |
| 〃 2.23～ 2.28                                 | 大阪             |     | 1   | 8          | 43  | 53  | 100 | ( 6)  |
| 〃 4. 1～ 4. 6                                 | 京都（山城）         |     |     | 5          | 15  | 16  | 26  | (16)  |
| 〃 4. 8～ 5. 1                                 | 京都（丹波），奈良（大和）  |     |     | 2          | 6   | 6   | 12  | (24)  |
| 〃 6. 9～ 6.13                                 | 山梨（甲府）         |     | 1   | 2          | 2   | 3   | 4   | ( 5)  |
| 〃 6.30～ 7. 9                                 | 宮城一部           |     |     | 2          | 9   | 10  | 19  | (11)  |
| 〃 7.10～ 8.15                                 | 岩手             |     | 1   | 13         | 67  | 47  | 118 | (41)  |
| 〃 8.18～ 8.25                                 | 新潟（西蒲原）        |     |     | 1          | 8   | 9   | 18  | ( 9)  |
| 〃 8.26～ 9.21                                 | 岩手             |     |     | 1          | 1   | 31  | 34  | (28)  |
| 〃 9.26～ 10.31                                | 群馬             |     | 2   | 10         | 67  | 54  | 132 | (36)  |
| 〃 11. 3～ 11.15                               | 川越             |     |     |            |     | 1   | 1   | 1     |
| 〃 11.16～ 12.12                               | 高崎             |     |     | 1          | 1   | 32  | 33  | (27)  |
| 〃 12.13～ 12.14                               | 埼玉（霞ヶ関）        |     |     | 1          | 1   | 1   | 1   | 1     |
| （大正 6 年総計）                                   |                |     | 5   | 50         | 228 | 272 | 515 | (213) |
| 7. 1.11～ 1.16                                | 群馬             |     |     | 1          | 5   | 5   | 11  | (62)  |
| 〃 2.15～ 3.28                                 | 岐阜             |     |     | 8          | 47  | 52  | 99  | (40)  |
| 〃 4. 1～ 5.20                                 | 和歌山            |     | 1   | 7          | 53  | 72  | 128 | (50)  |
| 〃 5.24～ 7.19                                 | 朝鮮             | 13道 | 11府 | 26         | 30面 | 91  | 110 | 57    |
| 〃 7.25～ 9. 5                                 | 青森             |     | 2   | 8          | 39  | 51  | 96  | (43)  |
| 〃 10.14～ 11.10                               | 福島（会津）         |     | 1   | 4          | 24  | 33  | 57  | }(28) |
|  | 栃木             |     |     | 1          | 2   | 2   | 3   |       |
| 〃 11.22～                                     | 東京府下           |     |     | 1          | 1   | 1   | 2   | ( 1)  |
| （大正 7 年総計）                                   |                |     | 4   | 11府<br>56郡 | 201 | 307 | 511 | (281) |
| 8. 2 月， 3 月                                  | 静岡             |     |     |            |     |     |     |       |
| 8. 5 月                                       | 中国大連           |     |     |            |     |     |     |       |

〔以上の表は『南船北馬集』各編によって作成したのであり，日数のうち，括弧つきは筆者が算定したものである。〕

「明治四三年二月」二十六日風、朝太海を発し、鴨川、天津兩町を経て小湊に至る時、烈風暴雨、天為に暗し、日蓮大十靈蹟の一たる誕生寺に詣するも、一人の参拝者を見ず、

漁屋連軒路一条、満天風雨卷寒潮、

入門独詣誕生寺、妙法無声春寂寥、

是より断崖千尋の棧道にかかる、暴風墜石と戦うて進む、其危険言ふべからず、是れ東海の親知らずと謂ふべし、房総の国境を越え、夷隅郡内に入るに約半里にして、其名も高き「おせんころがし」の險に至る、時に旋風人車を巻きて岩壁に衝突せしむ、身転し車破れたるも、幸に無事なるを得たるは、天祐にあらずして何ぞや、

暁天帶雨暗雲烟、狂浪怒号一路伝、

行到断崖風益激、阿仙転処我車顛、

名にしおふ阿仙の險も今よりは、円了転と人やいふらん、

昔時「おせん」と名くる婦人、風の為に海中に吹き落されて即死せるより其名起れりといふ、是より全身大雨に浸され、徒歩して興津に至る、時に天漸く晴る、更に腕車を雇ふて勝浦町に入り、勝浦館に投宿す、此日行程八里余なり、北条町以後は郡書記島田源太氏各所に同伴せられたり、<sup>(34)</sup>」。

以上のような日記文の他に、円了は、各年度の巡講旅行の町村、会場、講演回数（席）、聴衆数、総旅行日数を記している。『南船北馬集』発刊以前は、単なるメモ的な箇所もある。それらを網羅して作成したのが前掲の「円了巡講表」とでもいうべきものである。

時には九州巡講から帰京しても、帰宅することなくその足で東北巡講に

出かけるような巡講を行ない、時には年間二八〇余日も旅暮しをした円了の情熱、執念は何であり、何によったのであろうか。それは排仏毀釈以来の仏教の振起であり、体制に見捨てられた庶民の道德恢復を通しての啓蒙以外の何ものでもないと思われる（引用文献は常用漢字に改めてある）。

#### 注

- (1) 円了は当初仏教の振興を僧侶に求め、彼らの覚醒を呼びかけていた（『真理金針』明治十九年）が、「当時の僧侶と共に謀るの意なし」（『仏教活論序論』明治二十年）として僧侶を捨て広く国民に呼びかけるといふ路線変更をした。それは仏教が単に僧侶のみの問題ではなく、国民一般の問題という意味においてであり、その一つの仕事として哲学館を創立した。この路線の変更については、当時の評論家高橋五郎が「而して其同志ヲ地方ニ尋ネ、援助ヲ学者社会ニ求メラル、某心情実ニ憐ムニ堪タリ」（井上円了氏ノ仏教活論序論ヲ読ム）『国民之友』三号三五頁）と評するところであるが、円了の方向は、この意味からすれば、ますます地方に傾斜し、大学経営からも手を引くのである。
- (2) 「修身教会雑誌」は現在迄に発見されているのは36号までであるが、その号数からすれば13号が欠けている。しかし、各号の刊行月日と12号の通しページ（明治三八年一月十一日刊本文二八頁、広告四頁）の終りと14号の通しページの始り同二月十一日刊、三三頁）があっているので、雑誌号数は何らかのことで誤って刊行されたものと思われ、実数は35号で終わっていることになる。
- (3) 「二十三年間の暗黒時代の話」『修身教会雑誌』35号三六四頁。
- (4) 「修身教会設立に就きて(1)」同前書1号四頁。
- (5) 註(3)参照
- (6) 註(4)参照
- (7) 註(3)参照
- (8) 同前参照
- (9) 註(4)参照
- (10) 第6号三五三頁。
- (11) 『勸語略解』（明治三三年、三育社）、『勸語義解修身歌』（明治四一年、非

売品、『勸語玄義』（明治三五年、哲学館）があり、「修身教会雑誌」で屢々とりあげている。

(12) 山住正己『教育勸語』朝日選書154、四一頁。

(13) 第11号（明治三十七年十二月）一頁。

(14) 『修身教会設立旨趣』

(15) 修身教会設立の呼びかけに対して、各地からその設立、設立準備中、設立予定の応答があったことが『修身教会雑誌』各号に、その設立地名、発起人等の氏名を34例ほど掲載している。また『南船北馬集』各号にも、各地の修身教会の事にふれるところが多い。清韓への呼びかけは以下の通りである。

「本会設立の旨趣を支那朝鮮に伝へて彼国の人士に入会を勧むる文」『修身教会雑誌』十号。長きにわたるが、参考の爲、全文を掲げる（円了の起草、内田遠湖漢訳）。

#### 創設修身教会一名儒 仏教会 宗旨

本会設置之於日本。遂欲広之於清韓兩國。某意在于匡正世道人心。茲述其宗旨。徧告三国有心人士。切請贊襄焉。

我日本之於清韓。不啻同人種文字。彝倫心法。亦未嘗不以仁義忠孝為本。而儒仏二教實為之原焉。夫儒教之起於支那。不待言矣。若乃仏教。雖濫觴於印度。

而伝之我國者。非印度為支那。何則我所祖述智者大師善導大師等師。皆為隋唐之高僧。蓋二教起于支那。經三韓。以流伝於我國。三国之教。一其致者。為此也。夫儒道雖博。以修身為本。仏教雖広。以治心為主。治心与修身。相須而不可離。大学曰。欲修其身者。先誠其意。欲誠其意者。先正其心。正心誠意者。

二教之所同説。而仏所謂世間道。即為儒所謂人道。此豈同歸而殊途者非歟。若夫西洋之學。以格物致知為主。以開利用厚生之道。此今人所謂物質的文明者也。東洋之學。以修身治心為本。以成仁義忠孝之俗。此所謂精神的文明者也。且西洋文物之致盛者。在於日新。而東洋國勢之不振者。在於因循偷惰弗實踐。今也西洋物質的文明。滔滔東漸。而東洋文物。亦將一變。方是時。我精神的文明者。尤不可不再興之。不然。將有不堪其弊者矣。円了有見乎此。曩者不自揣。創立哲学館。大集諸生。研窮儒仏二道。兼修西洋哲学。爾來十有八年矣。

業与年進。迨今茲四月。遂定為大学。儒仏二道。各置專門之班。以益窮其蘊奧焉。然又思之。哲学館大学講求実理。未足以挽回東洋國勢之不振也。欲使人必實踐彝倫之教。維持東洋之道德。於是乎設修身教会者。而其所踐履。則不出於儒

井上円了の足跡

仏二道之外。故或称儒仏教会。亦可矣。匡教今日之弊。豈有急於此者乎。要之哲学館大学主講學。修身教会主窮行。其所講行者。均是儒仏二道。而輔之以西洋哲学。故又建哲学堂。以標識之。奉祀孔釈二聖。是為儒仏二道之祖。併祀瑣克刺底韓図二哲。是為西洋哲学之宗。蓋孔釈二聖。則哲学館大学所仰以為學祖。而修身教会所奉以為宗師者也。願三国諸君子。素同二教之源流者。仰望陸續入学。以濟其美。更約其要如左。

一本会以實踐儒仏修身治心之道為宗旨。

一各処分会設立之方。与其章程。隨各地情形。不必画一。以任自治。

一置函報本局於哲学館大学。毎月発行雑誌。以備本支教会相通氣脈。

一酌派遣哲学館大学畢業者於支会。演説本会宗旨。以圖招徠。

一如有人捐助金一円已上者。推為贊成員。酌呈雜誌若干。

明治三十七年十月

修身教会主唱者兼哲学館大学長

文学博士 井上円了 拜白

なお、第19号には、清国での賛同者34名の氏名が記載されている。

(16) 竹越与三郎『新日本史』『明治文学全集77』『明治史論集(1)』筑摩書房、三〇頁。

(17) 会沢安『新論』岩波文庫三二頁。

(18) 「もしほ草」(慶応四年五月三十日)『明治新聞集成編年史I』一三〇頁。

(19) 明治天皇は前後88回の行幸を行なっているが、特に(1)近畿中国九州巡幸

(明5・5・23〜7・12)、(2)東北巡幸(明9・6・2〜7・21)、(3)北陸東海

道巡幸(明11・8・30〜11・9)、(4)中央道巡幸(明13・6・16〜7・26)、(5)

東北北海道巡幸(明14・7・30〜10・11)、(6)山陽道巡幸(明18・7・26〜8・

12)が「六大巡幸」といわれている。これらの巡幸については「ほとんど明治

10年代に集中している。それも自由民権運動の昂揚から激化の時期に集中して

いる。それ以後はもはや一つ一つの村を天皇が親しく歩いて民草にまじかく接

するという、本来の意味の地方巡幸はおこなわれていない」(中公文庫版色川

大吉『日本の歴史』21巻二七頁)といわれるところである。

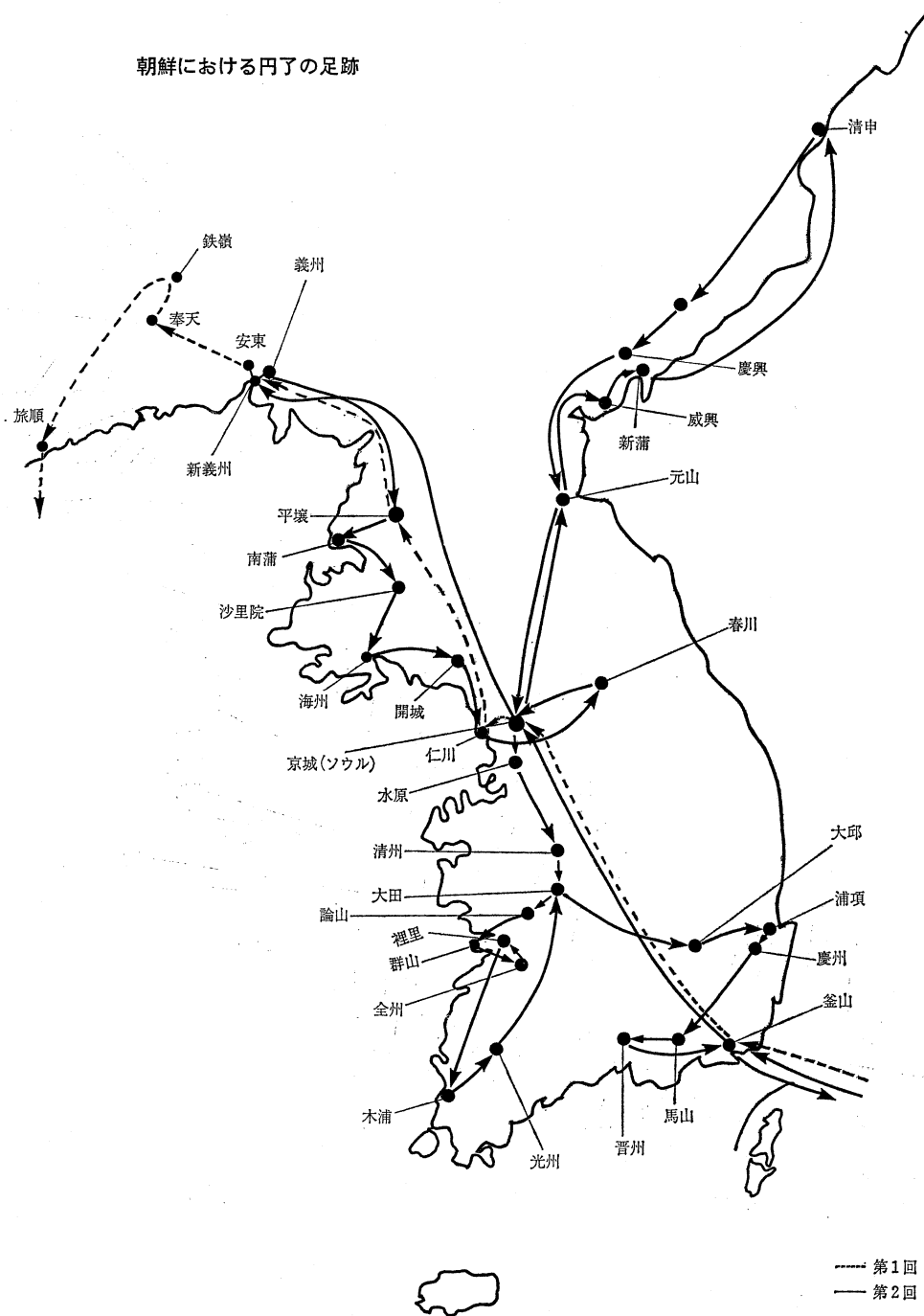
(20) 中央文庫版井上清『日本の歴史』20、一一八頁。

(21) 〃 色川大吉『日本の歴史』21、六九頁。

(22) 同前書七九頁。

- (23) 国会期成同盟合議書の第四条「来会には各組憲法見込案を持参研究すべし」とある(吉野作造『明治政史上編』日本評論社三三七頁参照)。
- (24) 『日本の歴史』21、二五八頁以下。
- (25) 竹越与三郎『新日本史』八〇頁。
- (26) 吉野作造『明治政史上編』五三四頁。
- (27) 仲新監修『大学の歴史』(『学校の歴史』第四巻)第一法規、昭和四四年、参照。
- (28) 「哲学館移転」趣演説「明治三十二年十一月、『東洋大学五十年史』三〇頁。
- (29) 井上円了『宗教教育関係論』明治二六年。
- (30) その『哲学館講義録』には「哲学館正科講義録」(後「哲学館高等科講義録」と改題)、「妖怪学講義録」、「尋常中学講義録」、「仏教専修科講義録」、「漢学専修科講義録」、「仏教普通科講義録」、「漢学普通科講義録」、「通俗哲学講義録」の八種がある。
- (31) 『学祖井上円了先生略伝・語録』京北学園、昭和三二年、二二頁。哲学館は明治三六年十月一日付で校名を「哲学館大学」と改称し、さらに明治三九年六月六日「東洋大学」と改称した。「修身教会」の設立は明治三七年二月十一日。
- (32) 「退隱の理由」『修身教会雑誌』26号二二二頁。
- (33) 「修身教会賛成諸君に告ぐ」同前誌二二五頁。
- (34) 『南船北馬集』第五編、明治四三年十二月二十日刊六頁。明治四三年二月十二日からの千葉県安房上総二州紀行の一日。

朝鮮における円了の足跡



## 円了の足跡

北海道・朝鮮については、地名の箇所を巡講・通過したが、本州・四国・九州については、地名の箇所を中心に又は拠点にして、その周辺農村部を網羅するように巡講している。

